

「ている」の論理的な文章中での使われ方：「効力持続」「長期的な動作継続」を重点にして

著者	江田 すみれ
雑誌名	国立国語研究所論集
号	2
ページ	19-47
発行年	2011-11
URL	http://doi.org/10.15084/00000480

「ている」の論理的な文章中での使われ方 ——「効力持続」「長期的な動作継続」を重点にして——

江田すみれ

国立国語研究所 共同研究員, 日本女子大学

要旨

本稿は、科学書に見られる「ている」の機能を、その長期の進行用法と完了用法に焦点を当てて分析したものである（それぞれ「運動長期」「効力持続」という名称を使う）。許（2000）に従い、本稿は「ている」の進行用法を、短期の進行相（「運動短期」）と長期の進行相（「運動長期」）の2種類に分類した。「運動短期」は日常的な行動の進行を表し「運動長期」は社会現象あるいは自然現象、もしくはある現象に対する著者の考えを提示する。「ている」の完了用法（「効力持続」）は過去のできごとの影響が現在でも続いていることを含意する。科学書において「効力持続」は先行する研究を引用するのに適用される。

科学書では「運動長期」と「効力持続」の「ている」は「話題提供」「結論」を表現する機能を持っている。「運動長期」「効力持続」の「ている」は、ある自然現象あるいは社会現象、研究の結果や研究者の主張を取り上げ、そのことによってその節で何を問題にするかを提示するという話題提供の役割を果たしていた。そして、段落末においては、一定の現象や考え方、社会的自然的変化を示すという形で結論を示す役割を担っていた。

科学的入門書で「運動長期」「効力持続」が話題提供、結論の表示に用いられるのは、「運動長期」が考えや理論あるいは一般的な事象を表すことができるためであろう。また「効力持続」は、先行研究を引用して議論の前提や結論を示している。「効力持続」の用法では統括主題の存在が、話題と議論、結論を関係させる要素として有効に働いているであろう。

キーワード：「ている」、 「運動長期」、 「効力持続」、 話題提供、 結論

1. はじめに

工藤（1995: 111, 116）はパーフェクトの「ている」が小説の中で果たす機能として逆進性、同時進行性をあげた。つまり、基本テンスが「た」で、「た」がタクシスの働く小説では、パーフェクトの「ている」は「た」の連続によって示される事態の連続をいったん止め、時の流れを遡り、前に表された事態と同時に存在する別の事態を表現すると述べている。そして、論理的なテキストでは理由・根拠を表すとしている。

本稿は科学について書かれている新書（以後、科学的入門書という表現を使う）を用い、その中での「ている」の機能を述べる。科学的入門書は大学で学ぶ外国人学習者の多くが触れる書物と考えられ、そのようなテキストでの表現の意味や用法を理解することは大学で学ぶ上で非常に重要なことであろうからである。

科学的入門書は研究史、実験とそれらをもとにした考察などが述べられ、「た」によって次々に起こる事態を時間にそって並べ描写していく小説とはテンスの扱いが異なることが予想され、当然「ている」も時の逆進という用法ではなく、違った使われ方をしていることが想像できる。

実際にどのような機能を持って使っているのでしょうか。

2. 先行研究

2.1 動詞+「ている」について

はじめにこれまでの「ている」(以後「動詞+「ている」」を簡単に「ている」と表現する)の
 アスペクトについての研究を簡単に見てみる。なお、研究者によって「ている」「た」の表記は「シ
 テイル」・シテイル・「ている」・「～ている」・「タ」・タ・「～た」などまちまちである。基本的に、
 引用部分では著者の記述に従うようにするが、本稿では基本的には「る」「た」「ている」を用い
 る。記述がとぎとぎにばらばらに見えることを先にお断りしておく。

金田一(1950)は動詞を状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種の動詞の四つに分類することを
 提唱し、それらの分類と「ている」がつくかどうか、つくとしたらどのような意味になるかを
 論じ、アスペクトの観点から観た動詞の分類をした。

金田一(1955)は「～る」「～た」「～ている」「～ところだ」などを取り上げ、どの種の動詞
 のどの形がテンスを表わし、どれがアスペクトを表現するかを論じ、テンスは「ある動詞その他
 用言の意味する状態・動作・作用が、ある標準から眺めた場合、時間的にそれより以前であるか、
 同時であるか、以後であるかを示す形態のちがいがい」であり、アスペクトは「動詞その他用言の意
 味する動作・作用の進行の相を示す形態のちがいがい」と定義した(金田一編1976に収録:60)。金
 田一(1955)があげたアスペクトの中で「ている」に関係するものは已然態・進行態(この中に
 反復進行態が含まれる)・将然態・単純状態態の4つがあげられる。ここからテンス・アスペク
 ト研究が明確に始まったと言えよう。

その後、藤井(1966)は、動詞の分類は「動詞+ている」ではなく動詞そのものの意味によっ
 てしなければならないとし、「結果動詞」「非結果動詞」という分類を示した。

奥田(1977:34)は金田一(1950)から吉川(1973)までの研究は「している」ばかりを取り
 上げているがアスペクト研究は「する」と「している」の対立を見なければならぬと批判し、「す
 る」と「している」は「一方がなければ他方もありえないという、きりはなすことのできない有
 機的な関係のなかにある」としている。そして金田一の四分類はこの対立に関わらない状態動詞
 と第四種の動詞を取り上げているが、そうではなく、まず、アスペクトの体系を持つものと持た
 ないものの二つに分け、そこから議論を始めるべきであると述べている。

アスペクト対立を持つ動詞の分類については、金田一(1950)では〈継続〉と〈瞬間〉という
 時間の長さによる分類がなされているが、それは動詞の意味を考えれば矛盾が明らかであると批
 判し、奥田(1978)は動詞の分類基準は〈主体の動作〉〈主体の変化〉が適当であるとし、この
 基準を用いれば自動詞他動詞の関係や受動態とアスペクトの関係も説明が可能であるとしている。

奥田(1978)によって動詞の分類に動詞の意味する時間の長さではなく主体の動作と変化とい
 う基準がもたらされたことは大きな転換である。

町田(1989:17,10,19)は日本語ではル・タの乏しい形式が多様な意味を持つことから、時制・
 アスペクトの意味を規定する条件を明確化する必要があるとして「時制・アスペクトが日本語で

どのような形式に対応しているか具体的かつ体系的に」記述している。町田は、アスペクトは、発話者の事象の時間的性質に対する見方を伝える形式とし、動詞の性質だけでなく動詞句のタイプ・主語・目的語・副詞句・助詞など様々な要素によって決定されるので、それらを十分考慮する必要があると述べている。そして、動詞句のタイプを概観し、主節、従属節の中で一定の動詞句が一定のアスペクトを表わす条件を整理している。

町田 (1989) は従来の動詞を中心とするアスペクト研究から、文中の他の要素との関係、文と文、節と節の関係まで視野を広げ、研究を進展させた。

工藤 (1995) は文単位の文法を脱却し、テキストの中でテンス・アスペクトを位置付けている。話し言葉・書き言葉両者を対象とし、文脈の中での文法現象をとらえた点が従来の研究と異なる点であろう。テキストの多様性も特色の一つである。話し言葉は小説の会話の文、書き言葉は小説の地の文・体験的ノンフィクション・非体験的ノンフィクションを観察している。

また、テンス・アスペクトのとらえ方も、形式・意味・機能の三つの観点から行われており、テキストの中でのアスペクトの機能を述べている点が注目される。「パーフェクト」を大きく取り上げ、その機能について多くを語ったことも特色である。

テンス・アスペクトの形式と機能が、話し言葉・小説・ノンフィクションで異なるというとらえ方は、文単位で文法現象を見ていたのでは理解できないことで、工藤 (1995) はその点で文法研究を大きく前進させたと言える。しかし、実際には大半の例が小説の文からとられており、自然会話・ノンフィクションの比重が比較的軽いことが惜まれる。

以上のように、「ている」の研究は「動詞+ている」の形を研究テーマとするところから始まり、完成相と継続相の対立を取り入れ、文中の他の要素との関係を取り上げ、テキスト全体でのアスペクト形式の機能を視野に入れる研究まで進んできた。本稿はこれまでの研究成果を踏まえ、「ている」の論理的なテキスト、具体的には科学的入門書の中での意味・用法、文法上の性質、テキスト中での機能を調査し記述したい。この調査によって大学で学ぶ学習者が読むようなテキストでの「ている」の機能が明確になることを希望する。

2.2 「ている」の用法の分類

次に、「ている」の用法の分類がどのように取り上げられてきたかを見ることにする。

金田一 (1955) は「ている」の意味を「已然態」「進行態」「将然態」「単純状態態」と四つにした。進行態の中に反復進行態が含まれる。

藤井 (1966) は、金田一 (1950, 1955) が「あの人はたくさんの小説を書いている」の「書いている」は継続動詞が一時的に瞬間動詞として使われていると述べている用法を「経験」として独立させ、(1) 動作の進行、(2) 持続 (じっとしているなど)、(3) 結果の残存、(4) 経験、(5) 単純状態態、(6) 反復、(7) 存在と七つに分類した。「経験」の用法はすべての動作動詞によって作ることが可能と述べている。藤井 (1966) の研究以後「経験」の用法が研究者によって取り上げられるようになる。

吉川 (1973) はそれまでの研究史をまとめ「ている」の意味を「動作継続」「結果継続」「習慣」

「経験」「状態」と五分類し、「経験」の用法は結果継続からの派生であると説明している。

Comrie (1976: 18, 24, 52) は様々な言語におけるアスペクトの表現を研究し, perfectivity, imperfectivity と perfect の概念の違いについて述べている。Perfective というのは丸ごとの事態で、分割せずに事態を述べる場合のアスペクトであり, imperfective というのは事態を内側から述べる方法である。一方 perfect というのは二つの時に関わる概念であり, 発生した事態がのちの時に何らかの影響を持っていることを表すかたちであるとしている。

寺村(1984)は「ている」の用法を大きく五つに分類している。「動作や現象が継続していること」「結果の状態」「現在の習慣」「過去の事実の回想」「性状規定」である。寺村(1984)は「経験」という用語をやめ「過去の事実の回想」とし, この用法の使い方を広く理解した。

工藤(1982: 78)は「ている」の基本的な意味は継続であるとし, その用法を大きく三つに分類している。

- (I) 継続
 - (1) 動きの継続
 - (2) 変化の結果の継続
- (II)
 - (1) 反復
 - (2) 現在有効な過去の運動の実現
- (III) 単なる状態

この(II)の(2)の「現在有効な過去の運動の実現」は二つの用法があり, それらは①過去に実現した運動が, 記録として現在残されていること, ②過去に実現した運動が現在の状態に何らかの関わりを持っていること, を表しているとしている。藤井(1966), 吉川(1973)で「経験」とされていた用法を「現在有効な過去の運動の実現」と現実に合う名前をつけて分類した点, その内容に「記録」「現在との関係」の2つの用法があるとした点が進展である。

工藤(1995)はさらに論を進め, アスペクト, テンス, ムード, ヴォイスを関係づけて論じ, 「シテイル」の用法を大きくテンポラルな用法, モーダルな用法, 脱アスペクト用法, 脱テンス・アスペクト用法と四つに分類し, 金田一(1955), 藤井(1966)などが単純状態としていた用法を脱アスペクト用法とした。テンポラルな用法については, 「シテイル」の基本的な意味は「継続性」であり, 「動作の継続」「変化結果の継続」「パーフェクト」「反復」という用法を持つとして, パーフェクトを次のように定義している(工藤1995: 39)。

「パーフェクト性」 後続時点における, それ以前に成立した運動の効力の現存

工藤(1982, 1995)によって「パーフェクト」の定義が明確になった。しかし, 「パーフェクト」という用語は日本語の文脈においた場合, 「それ以前に成立した運動の効力の現存」という意味を表面的に表しているだろうか。Comrie(1976)も perfect の定義をして議論を始めているが, 日本語にこの概念を導入する場合は語を見た段階でその語の意味する内容が分かるような命名が理解を促進すると言えるだろう。

庵(2001)は「ている」の用法を, a 進行中, b 結果残存, c 繰り返し, d 効力持続, e 記録, f

完了, g 反事実, h 単なる状態, のように分類した。

庵 (2001) は工藤 (1995) の「パーフェクト」に対し、「効力を持つこと」はすべての例には当てはまらないとし, 工藤 (1995) の「パーフェクト」にあたるものとして「効力持続」「記録」「完了」という三つの分類法を提言した。

庵 (2001) は「効力」を持たない例として次のような例文をあげ,

- (1) (テレビのニュース) 俳優の渥美清さんが1週間前に亡くなっていたことがわかりました。
- (2) 昨年, 本因坊治勲と小林光一天元が相次いで 1000 勝を達成したが, 大竹英雄九段も昨年 5 月に到達していたことがわかった。(以上, 庵 2001: 77)

上のような「効力」を持たない, 「基準時以前に動作・出来事が完結」したことだけを述べるものを「完了」とし, 未来完了は「～ている (だろう)」, 過去完了は「～ていた」, 現在完了として「～た」を認めている。

庵 (2001) は「効力」の存在を問題とし, 本稿はパーフェクトという名前を問題にした。以下に順に見ていく。

「効力」について考えよう。工藤 (1995) は過去パーフェクト, 現在パーフェクト, 未来パーフェクトを同じように, 発話時点に対して影響があるもの, と扱っている。庵 (2001) はすべての例が「効力」を持っているわけではないと述べている。本稿は庵 (2001) のあげた「効力」を持たない例がどちらも「ていた」であることに注目する。「ていた」は「発見」(高橋 1985: 288-296, 藤城 1996) の用法を持っており, 上の (1) (2) の例は完了という理解も可能であるが, 「発見」という理解もできるであろう。庵 (2001) の効力を持つことはすべての例に対して当てはまるか, という疑問も考慮し, 本稿は過去完了・未来完了あるいは「発見」の意味を持つ「ていた」は別に扱うこととし, 今回は現在を基準時とする「ている」だけを問題にする¹。過去に起こった事態が現在に関係を持つ, あるいは何らかの間接的な「効力」を持つことは現在の「ている」に関すると当てはまると言える。

次にパーフェクトという名称について考える。パーフェクトという名称は過去に起こった出来事が現在に効力あるいは影響を持つという定義と結びつくとは言えない。つまり, 実態が分かりにくい。また, 庵 (2001) は「完了」という用法も提案している。筆者が「ていた」を視野に入れ, 「ていた」について「完了」という分類を使った場合, 「完了」と「パーフェクト」はまぎらわしくなる。そして, 英文要約などでも混乱するであろう。庵 (2001) の「効力持続」という名称は過去の事態が現在に効力を持つ, ということが名前に含まれているので, 本稿は庵 (2001) の命名に賛成する。ただし, 庵 (2001) は「効力持続」と「記録」を別のものとして分類しているが, これらは実際の文脈では両者を兼ねる例が見られ, 「記録」の文も現在に「効力」を持つという意味では共通した性質を持つ。本稿では「効力持続」と「記録」を一括し「効力持続」と

¹ 今回得られた用例のうち, 未来完了を表わす例は以下のような例であった。これらは考察から省いた。
・2100 年には確実に太郎は死んでいよう。ただ, 彼の子孫が, 曾祖父と親しかった次郎を迎えてくれるにすぎない。(時間)

して扱う。

庵 (2001) の「反事実」は「ている」そのものに反事実の意味があるのではなく、文脈によって反事実の意味が出てくること、反事実の文は動作継続・結果継続の用法にまたがることにより、「反事実」という分類法は採用しなかった。

次に「動作継続」の問題を取り上げる。

許夏珮 (2000) は、OPI データを用いて中・韓・英語話者による「テイル」の習得状況を調査した。その結果、「テイル」は

運動の持続 (±長期) → 性状 → 繰り返し → 結果の状態 → 変化 → 経歴・経験

という順で習得されると述べている。許 (2000) の分類の特色は動作・作用の継続を「運動の持続長期」「運動の持続短期」と二分して調査したこと、「変化」を入れたことである。

この「運動の持続短期」と「運動の持続長期」に分類する方法を、本稿でも採用する。よく使う語なので「運動短期」「運動長期」と省略する。「運動長期」という分類法を使うことにより、本調査で用いた資料の特性の一部が明らかになると考えたためである。「経験」の用語は上に述べたように「効力持続」とし、「性状」も、「可変」と「不変」には分けず、一括して「性状」とした。「変化」は多くの研究が採用していない分類法なので、本稿でも採用しなかった。

以上先行研究の検討の結果、本稿で用いる「ている」についての分類は以下のようである。

a 運動短期 b 運動長期 c 結果状態 d 繰り返し e 効力持続 f 性状

3. 調査方法

3.1 資料および調査方法

『CASTEL/J』(日本語教育支援システム研究会が開発した日本語教育用データとデータベース)より自然科学、社会科学の新書をそれぞれ4冊選び、その中から採用する部分に偏りがないようにして5万字ずつとり、各20万字のコーパスを作った。作品名は以下のようで、()の中に省略形をあげた。

自然科学入門書

井上昌次郎 (1988) 『睡眠の不思議』(睡眠), 都筑卓司 (1991) 『時間の不思議』(時間), 中原英臣・佐川峻 (1991) 『進化論が変わる』(進化), 米山正信 (1991) 『化学とんち問答』(化学) 各5万字

社会科学入門書

織田武雄 (1974) 『地図の歴史—日本篇』(地図), 吉田寿三郎 (1981) 『高齢化社会』(高齢), 中川剛 (1985) 『憲法を読む』(憲法), 下川浩一 (1990) 『日本の企業発展史』(企業) 各5万字

「てい」「でい」で検索をかけ、不要な物を取り除く方法でデータを集めた。「ていた」「ていない」は今回は調査の対象からはずした。

検索ソフトは KWIC Finder Ver.3.28 を使用した。

収集された「ている」の例文は社会科学 980 文、自然科学 1095 文であった。それを 2.2 で述

べた六つに分類し、科学的入門書ではどの用法がよく使われているかを調べた。

なお、用例を引用する場合は、『CASTEL/J』のデータ形式（全角テキスト）のまま全角で示す。

3.2 「ている」の用法の分類の基準

以下に本調査による「動詞＋ている」の分類基準をあげる。

「運動短期」

動作・作用を表すもの、動作・作用をしないことを表すものも含む（「じっとする」など 吉川 1973）。

「運動長期」

動作・作用などを表し、それが長期間にわたることが文脈から明らかなもの。長期間の一つの基準として一日を超えて継続するものという基準を用いる。中村（1996）が「反復」の意味が現れる条件として夜を超えるかどうかという基準を用いているので、それを本稿でも採用した。

- (3) 幼児期のレム睡眠は、脳、とくに感覚系の成熟とか神経回路の柔軟性を促進することに重要なはたらきをしているのではないかと考えられる。（睡眠）

また、徐々に変化する動きも長期にわたる例は「運動長期」に含めた。

- (4) 70年代以降になると、企業の社会への責任や公共性、国際性、文化性、個人の創造性や自由、高度技術への挑戦、といったことを強調するようになってきている。（企業）

これは変化も一種の作用であり、動きが感じられるためである。

「繰り返し」

単一の主体の動作の繰り返しの場合も複数の主体に関わる場合もある。

- (5) 報酬（餌）のない刺激をくりかえし聞かされていると、イヌは音に反応しなくなり、餌を予期してだしていた唾液をださなくなってしまう。（睡眠）

「繰り返し」と「運動長期」は区別が難しい場合が見られた。

- (6) ロケット博士として知られる工学者糸川英夫は、自分専用の枕を、どこにでももちあるいて、快眠を確保しているという。（時間）
- (7) 別々の種として分類され、交尾をして残せる子どもの数が減少する（中略）ような集団同士でも、一部の地域で分布が重なり合い、長年にわたって交配を続けている例が、カエル、バッタ、ハツカネズミなどの種類で知られている。（進化）

「繰り返し」は「する」を「ている」に置き換えても意味は変わらないと述べられている（工藤 1995: 76）ので、その基準を使い、(6) のような例を「繰り返し」に、(7) のように「する」に置き換えできない例を「運動長期」と分類した。

「結果状態」

ある事柄が起こった後の状態を表しているもの、結果動詞を使った文で「性状」とはとりによくものを「結果状態」とした。

- (8) 議員定数の割当てが人口に比例しないまま放置されていると、選挙民の一票の重みは人口が増加した地域ほど軽くなってしまい、不平等である。(憲法)
- (9) よくばりの現代人がもとめる眠りは、自然の生理的な欲求のレベルをとくにこえている。(睡眠)

科学的入門書では明確に事態が起こったかどうか判断が難しい例も見られた。(8)は「放置する」という行為をしたというより何もしなかったということであるが、「放置する」という結果動詞を使っているため、「結果状態」に含めた。

「効力持続」

「効力持続」は過去に起こった出来事が現在に効力あるいは影響を持つものである。事態自身は一度過去に終了しており、現在まで継続していない。

- (10) そういう人間の本性を洞察していた、近代政治科学の先駆者トマス・ホブスは、人が自然のままに置かれると、「万人の万人にたいする闘争状態」に陥ると、主著である『リバイアサン』(一六五一)に記している。(憲法)
- (11) 西ドイツのA・E・コルンミュラーらは、二頭のネコの頸動脈を交叉させて、たがいに血流交換がおこるようにした。いっぽうのネコの脳を電気刺激して眠らせると、やがて他方のネコも眠りはじめた。このばあい、両者ともに脳波をモニターしているので、睡眠と覚醒の状態を厳密に判定できたところが、これまでの研究と飛躍的にことなっている。(睡眠)
- (12) コペンハーゲンにデウ・ガムル・パイという有名な老人総合施設があることは既述したが、私たちの試みの二年後にデイ・ホスピタルを始めている。(高齢)

(10)は『リバイアサン』に書いた、ということが過去のことであるので「効力持続」とした。このように「効力持続」は引用表現としてよく用いられる。(11)(12)のように過去の事態で現在まで何らかの関係がある場合も用いられている。

「運動長期」と「効力持続」の違いは、「運動長期」が現在まで続く動作・作用を述べるのに対し、「効力持続」は一度その事柄が終了していることとした。

- (13) エチルアルコールは、分子式で書くとC₂H₆Oである。ふつう示性式でC₂H₅OHと書いている。(化学)
- (14) 『種の起原』の中でダーウィンは、飼育されている動物や品種改良された植物が、もとの品種からいかに変化したかをくわしく書いている。(進化)

上の(13)は現在もそのように書くので「運動長期」とし、(14)はダーウィンがその著書に「書

いた」ことを表しているので「効力持続」とした。

「結果状態」的な例については、過去の文脈の中で結果が出、その状態が現在ととぎれているものは「効力持続」とし、その結果が続いていると読める場合は「結果状態」とした。

- (15) カルメ焼きはコークスに似ているんだ。ヘー、どんなところが？かたまる前に一回融けているところがさ。(化学)
- (16) 入れ物に入れておいた塩がとけている。(作例)
- (17) 純再生産率について見てみると、戦前も一九二〇年から一九四〇年までの二十年間で〇・一五ポイント低下しているが、戦後の場合は一九五〇年から一九五五年までの五年間で〇・四五ポイントも低下している。(企業)

(15) は一度溶けて固まったという性質を問題にしている。溶けた後で固まったというところから、溶けたことは過去であり、その後に固まったという文脈があり、現在と一旦切れているので「効力持続」として採用した。(16) は比較のために出した作例だが、塩が空気に触れて溶けた、と述べる文は現在溶けた塩が目の前にあるという文脈なので「結果状態」となる。(17) は1920年から1940年までの推移、1950年から1955年までの推移、と両者ともに過去の結果であり、現在と切りはなされているので「効力持続」とした。

「性状」

時間と関係がない状態を示すもの。「結果状態」は、結果動詞が表す事柄があり、その結果としてある一定の状態になるが、「性状」はそのようなきっかけがないものである。

- (18) 電子がまわる軌道はとびとびにいくつもあって、安定した状態では、電子は規則にそって低い軌道に乗っている。そこへ光が当たると、電子は一時、上の方の軌道にはね上げられる。(時間)

4. 調査結果

このように分類して用法を集計した結果が表1である。

表1 科学的入門書における「ている」の用法

	社会科学		自然科学		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
運動短期	13	1.3%	54	4.9%	67	3.2%
運動長期	255	26.0%	333	30.4%	588	28.3%
繰り返し	11	1.1%	31	2.8%	42	2.0%
結果状態	353	36.0%	192	17.5%	545	26.3%
効力持続	193	19.7%	108	9.9%	301	14.6%
性状	155	15.8%	377	34.4%	532	25.6%
合計	980	100.0%	1095	100.0%	2075	100.0%

「運動短期」が非常に少ない。「運動長期」「結果状態」「性状」「効力持続」が多い。

「運動短期」は以下のように具体的な行為を描く場合に用いられている。

- (19) この病気の症状はたいへん劇的で、話をしている最中に眠ってしまうとか、自転車に乗っていて眠ってしまうなど、ほんらい眠れないはずの状況で、突如として「睡眠発作」がおこる。(睡眠)
- (20) 老人たちは悠々自適の生活をしている。海岸を歩いている人も非常にはなやかな服装をしている。(高齢)

しかし、科学的入門書ではそうした具体的な行為・動作は、例などでは見られるが、事象の分析や社会の情勢を描写する場合などでは使われないことが多い。そのため、このように少なくなっている。

それに対し、「運動長期」は一般的な現象や動きについて述べるのに使われる。

- (21) 現在日本企業の国際的なプレゼンスが高まり、より国際性と大きなビジョンをもった活動がこれらの団体には要請されている中で、三団体の不協和音や指導者のリーダーシップの欠如がしきりに指摘されている。(企業)

「結果状態」は次の例のように、結果動詞を用いる文で使われていた。

- (22) 前国家的権利と後国家的権利とが基本的人権として一括されているので、日本国憲法の人権イデオロギーは論理が一貫せず、理念がぶちこわしになっている。(憲法)

(22) では日本国憲法の文章の中に述べられている人権イデオロギーは矛盾を含んでいるため、理念として一貫していないということを述べている。日本国憲法は十分な思索を経ないで作られたため、基本的理念を混乱させた、と述べており、時間と関係のない「性状」とはとれないため、「結果状態」と判断した。

「運動短期」と「運動長期」の関係について、別の調査結果もあげておく。筆者はこの調査と並行して会話・小説・科学的入門書の3種類の等量のコーパスを用いて「ている」の使われ方を調査した。この調査では会話・小説の地の文、科学的入門書をそれぞれ40万字ずつ用いて「てい」を検索し、「ている」についてはその用法を「運動短期」「運動長期」「繰り返し」「結果状態」「効力持続」「性状」に分類して集計した²。

² 資料は以下のとおりである。

会話 現代日本語研究会編 (1999) 『女性のことば・職場編』 ひつじ書房

現代日本語研究会編 (2002) 『男性のことば・職場編』 ひつじ書房

小説 沢木耕太郎 (1981) 『一瞬の夏』、椎名誠 (1987) 『新橋烏森口青春篇』、宮本輝 (1982) 『錦繡』、村上春樹 (1985) 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、安部公房 (1962) 『砂の女』、北杜夫 (1964) 『楡家の人びと』、塩野七生 (1983) 『コンスタンティノーブルの陥落』、筒井康隆 (1977) 『エディプスの恋人』

会話はそれぞれから20万字採用し、小説はそれぞれから5万字ずつ採用して、会話40万字、小説40万字のコーパスを構成した。

表2によると、「運動長期」は3種類のコーパスにおいてどれも20%以上を占めており、その中でも特に科学的入門書において割合が高い。一方、「運動短期」は小説では「運動長期」と同じ程度の割合があるが、会話においては、「運動長期」ほどの頻度は見られない。小説では人物の行動を描写するため「運動短期」が用いられるが、会話での「運動短期」は「運動長期」の半数程度であり、科学的入門書では非常に少ない。この傾向は「運動短期」と「運動長期」を分けて考えてみて見えたことであり、本稿ではその結果をもとに「運動長期」が科学的なテキストで多いと述べているが、これは今回使った新書で多いのか、論述的なテキストでは一般的に多いのか、随筆などではどうなのかなど、いろいろな文体での使用状況については更に調査をしてみなければならないであろう。

表2 会話・小説・科学的入門書における「ている」の用法

	会話		小説		科学的入門書	
	回数	割合	回数	割合	回数	割合
運動短期	167	11.6%	388	24.7%	67	3.2%
運動長期	321	22.4%	337	21.5%	587	28.3%
繰り返し	135	9.4%	72	4.6%	42	2.0%
結果状態	560	39.0%	442	28.1%	545	26.3%
効力持続	144	10.0%	125	8.0%	302	14.6%
性状	109	7.6%	207	13.2%	532	25.6%
合計	1436	100.0%	1571	100.0%	2075	100.0%

「運動短期」と「運動長期」を分割して考えたように、「結果状態」も具体的な動きがあってその結果が存在する場合と、結果動詞は使われているが、より一般的な、「性状」に近い例とを分割し整理したほうがいいのかもかもしれない。このあたりは機会を改めて再度考えてみたい。

5. 分析

なぜ科学的入門書では「運動長期」と「効力持続」が多いか、考える。

5.1 「運動長期」

「運動長期」は長期間にわたる動作・作用を表す。科学的入門書ではどのようなことが「運動長期」の形によって述べられているかを大まかに見てみよう。

「運動長期」の文を大まかに「思考・言語」「運動」「現象」「感情感覚」と分類して以下に示す。どのようなことが「運動長期」で表現されているかを見るのが目的であり、厳密に分類するものではない。「感情感覚」は例も多くなく、本論の議論ともあまり関係していないと思われるので³、「思考・言語」「運動」「現象」について述べる。

³ 感情表現にも長期的なものが見られた。しかし、これはあまり数は多くない。以下のような例が見られた。
 ・マルメも老人対策を誇りにしているところで、このとき案内してくれた人は、脊椎損傷で両下肢があまりきかない。(高齢)
 ・私がこういった家庭を訪問したとき、当初本人の口からも「自分たちは恵まれている」という言葉をなん

「思考・言語」

「思考・感情」の動詞は、研究者によって動詞全体の中での位置付けが異なる。町田（1989）は状態動詞に含め、工藤（1995）はこれを「内的情態動詞」として「外的運動動詞」と「静態動詞」の中間的なものとしている。工藤（1995: 71）は同時に、「内的情態動詞」に「る」―「ている」の対立があることを考慮すると「外的運動動詞」と「内的情態動詞」を一括して運動動詞とすることも可能とも述べている。本稿ではこの「外的運動動詞」と「内的情態動詞」を一括して運動動詞とする考え方をとり、通常の動作動詞と同様、これらの動詞の「ている」は「運動短期」「運動長期」を表現するものとして扱った。

科学的入門書では、「考える」「研究する」「～といわれる」「～とされる」など思考や言語に関係する表現を使った文が多い。

- (23) カナダの神経解剖学者バーバラ・ジョーンズも、(中略) 橋から橋被蓋の背側部をへて、腹内側部の延髄網様体にいたる経路が、レム睡眠と筋弛緩に必須である、と考えている。(睡眠)
- (24) 南方中国人の祖先は南モンゴロイドだとされている。(進化)
- (25) スウェーデンと日本のホーム・ヘルパーの数を比べると、老人の数に対して日本はスウェーデンの八十分の一ぐらいといわれている。(高齢)

これらの表現は、あるテーマに従って研究し、その結果を述べる文脈で用いられている。どのような研究が行われており、どのような考え方が一般的であるか、あるいはある研究者はどのような考えであるかを述べている。科学的なテキストでは、一般的に認められている考えや新しい学説などを述べて、それに対する事例を出す、反論を出す、その説を検討するなどの記述が行われる。

このほかの研究や説の発表に関係する表現は「注目している」「見直されている」「認識されている」「示している」「主張している」などであった。

「運動」

人やものの長期間にわたる動作・作用をまとめて「運動」とした。動作・作用の動きが感じられるものである。

- (26) 心臓は全身に血液を送り出しているポンプであることは衆知のとおりだ。(化学)
- (27) 固体では、それを構成するたくさんの小さな原子が規則正しく並んでおり、しかもそれら原子は、狭い範囲で振動している。(化学)
- (28) この間企業として多大の教育コストを負担していることを、これは意味している。(企業)

(26) は心臓の働きを述べる文である。期間を定めない動きの継続である。(27) は「振動する」

どか開いた。(中略)しかし、しばらくいて帰ろうとすると(中略)しきりにひきとめる。物質的には恵まれているが、孤独感にさいなまれているのだ。(高齢)

という動きを表現しており、(28)の「コストを負担している」は「費用を払い続けている」という意味なので「運動長期」の「運動」とした。ほかに、「一人の老人を7人で支えている」「企業が後援している」などのような表現が見られた。

「運動長期」は、個別の例ではなく、一般的な物事の動き、社会の動きなどを述べることで表せる形であり、事物や社会の一般的な傾向などを表現するのに適した形であると言えよう。

- (29) 社会サービスの精力が亡命者対策に向けられているのでは老年問題への対応が遅れているのはやむを得ないことであった。(高齢)
- (30) それがアメリカ独立の根拠となり、共和国の理論づけにもなって、アメリカの建国神話ができあがり、今日まで受けつがれている。(憲法)

(29) のように行為者を明示しない受身文による「運動長期」の文は社会科学に多く見られた。同様な例として「デイ・サービスが運営されている」「補償が実施されている」などがある。

行為者を明示しない受身文では動作主を不問に付すところからより一層一般化が進み、社会的な状況に近い表現となり、議論の背景的な情報を提示することになる。

「現象」

一方、行為や活動があまり感じられない例も数多く見られた。これらを「現象」とした。自然現象・社会現象の表現も見られた。長期的な変化の表現はここに分類した。

- (31) 石灰分は陸地と海の間をぐるぐると循環していることになる。(進化)
- (32) 今日でもイギリスの老人は、生活するに足りるだけの年金をもらえず、貯蓄のない老人が非常にみじめな生活を強いられていることは前述したとおりである。(高齢)
- (33) 現場の工程技術＝生産技術をも重視しつつも、研究開発体制をますます重視する方向に進んでいるといえよう。(企業)

(31) は自然現象の継続的な動きである。「循環する」というのは動きの表現ではあるが、石灰分そのものが動いているというより、長い時間の中で石灰石として陸地に存在することも動物の殻の形で海中に存在することもあるということを述べており、石灰分が運動しているわけではないので、「現象」とした。ほかに「本能は、その行動に対する強い欲求と、それが充足されるときに感じるよろこびとを、自動的にあたえてきている」「低い水準で推移している」などの例が見られた。

(32) の例では「老人」がこの現象に巻き込まれているだけなので「運動」とは分類しにくい。同様の例として「長い歴史が重ねられている」「変貌を迫られている」、自然科学では「生体の機能が調節されている」などがある。

(33) は社会がある方向に動き続けているという継続的な変化を表現している。社会科学ではこのような継続的な変化はよく使われている。「衰退の兆しを見せ始めている」「変質してきている」「急速に進展している」などのような表現が見られた。

「運動」と「現象」は、傾向として運動が読みとれるもの、読みとりにくいものという基準で分けたもので、「精神や肉体が活動を持続している」などのように、境界が明確でない例も見られた。「現象」と分類した例では動作性や意志性は低いと言える。

科学的入門書における「運動長期」は、「運動」「現象」ともに、一般的な社会的現象あるいは自然の現象を表す例が多く、自然現象・社会現象を取り上げ、それについて議論する科学的な文献では必要な表現と言える。

社会の変化を取り上げその原因や傾向などを述べる社会科学では、変化の表現はぜひ必要な物と言える。社会科学で変化を表す「運動長期」が多いことはうなずける。

「思考・言語」の動詞の「ている」は議論の前提となる研究動向を述べるなどの使われ方をしていたためよく使われている。

従来「動作継続」とまとめられてきた動作性の述語の「ている」の形式の中に、長期にわたる、運動性や意志性の感じにくい例が含まれていること、それは社会現象・自然現象と言えるような、状態性の強い、背景的な事柄を表わしていることを述べてきた。

以上述べてきたような表現が使われることにより、科学的入門書では「運動長期」の例が多くなっていると言えよう。

5.2 「効力持続」

科学的入門書での「効力持続」の使われ方、意味を見てみよう。科学的入門書での「現在の関係」はどのような関係になっているか、「記録」はどのような特色を持っているだろうか。

5.2.1 効力あるいは影響の存在

「効力持続」の「ている」は過去に起こったことで現在にその効力や影響が残っていることを述べる。科学的入門書では現在とどのように関係しているだろうか。例を見てみよう。以下には「思考・言語」の動詞以外の例をあげた。

- (34) 高度成長のひずみとして公害問題が噴出したことにより、日本はいっきよに公害先進国になったといわれたものだが、その後の経過としては、公害防止技術への真剣な取り組みと、公害防止費用をその費用構造の中に織り込んで何とかこれに対応することに成功している。(企業)
- (35) コペンハーゲンにデウ・ガムル・パイという有名な老人総合施設があることは既述したが、私たちの試みの二年後にデイ・ホスピタルを始めている。(高齢)

(34) は公害防止に成功したことが現在まで一定の社会的効果を持ったこととして挙げられている。(35) はデンマークの老人総合施設がデイ・ホスピタルを始めた、と述べ、現在の老人対策について論を続けている。

次の例は「た」「る」と「効力持続」がその効果を明確に示している例である。

- (36) ついで、フランスから二つの研究が①発表された。パリのジョエル・アドリアンらは、植木鉢法でレム睡眠を選択的にうばっておいたネズミの脳脊髄液を、薬剤によりレム睡眠を抑制してあるネズミの脳室内に①注入してみた。すると、レム睡眠が②回復したのである。また、ジュヴェー門下のマルセル・サラノンも、類似の実験をネコでおこなって、同様の結果を①えた。これらの物質の正体については、まだなにもわかっていない。

また、ジュヴェー門下のフランソワ・リウーらと、メキシコのラウル・ドルッカー＝コリンらは、血管作動性腸ポリペプチドに、睡眠促進作用があり、とくにレム睡眠に効果があるという結論を、それぞれネズミとネコでの実験から③えている。

これよりずっと以前から、ドルッカー＝コリンは、レム睡眠期のさい、脳幹には未知の蛋白質が出現している、とくりかえし①報告してきた。

さいきん、フィンランドのダグ・ステンベリーとターシャ・ポルカ＝ハイスカーネンも、同様の事実を①つきとめたが、物質の単離はたいへんむずかしい、②ということだ。(睡眠)

(36) は「た」を①、「る」を②、「ている」を③で表示した⁴。研究の経過・結果や実験などの事例は「た」(①)、結果についての解説は「る」(②)で示され、結果の中で現在と関係がある事柄は「効力持続」で記されている。「まだなにもわかっていない」ジョエル・アドリアンらの実験、ドルッカーやダグ・ステンベリーらの実験の報告は「た」で示されており、ある睡眠物質が効果があると述べている事柄は「効力持続」で表現されており、現在との関係を「効力持続」で表わすという傾向が明確に出ている。

以上の例で見られるように、過去の事態で現在と関係があると筆者がとらえた事柄は「効力持続」で表現されている。

5.2.2 「記録」と引用

「効力持続」は科学的入門書では引用表現としてよく用いられている。この用法は、工藤(1982)庵(2001)の用語の「記録」と言える。論文で筆者と発表年を表わす形式は時間と証拠を示す「記録」の用法である。

- (37) 昭和二一年五月一六日召集の第九〇帝国議会、すなわち「日本国国民ノ自由ニ表明セル意思」(ポツダム宣言)を代弁するはずのいわゆる憲法制定議会で、憲法学者佐々木惣一は、審議中の憲法案について、内容から見ても手続きから見ても、とうてい自主的な制定を可能にするとは思えないという意見を表明している(八月二九日貴族院本会議)。(憲法)
- (38) 天武天皇十年(六八二)には「多禰国(種子島)図」を、同十三年には「信濃国図」を朝廷から派遣された使臣たちが呈上していることからみて、国郡図の作成は辺境の地方にまで及ぶようになったことがうかがわれる。(地図)

⁴「レム睡眠が②回復したのである」は「た」に「のだ」が接続した形である。「のだ」は「のだった」と「た」にすることができる形式なので、ここでは「る」であると判断した。文中にある「わかっていない」は「ている」にあたるが、今回は「ていない」について触れないことにしている。

(37) (38) はいつのことであるかが明示されており、論文形式ならば証拠となる引用文献が記されるはずの記述であり、「記録」の用法と言えるであろう。

(39) 環境権などの新しい人権との関係で、幸福追求権が注目されている。アメリカの独立宣言は、天賦の権利として、生命・自由・幸福の追求を挙げている。起草者ジェファソンは書簡のなかで、市民の自然権として、生命・自由・財産・安全の保持を数えている。独立宣言と同年に発布されたバージニアの権利章典では、生命・自由・財産が生得の権利とされ、幸福と安全を追求獲得する前提として位置づけられている。合衆国憲法の修正第五条にも、生命・自由・財産が並記されている。この当時の幸福追求の意味は非常に限定されていた。地上の幸福に役立つものが財産の所有、永遠の幸福に役立つものが信教の自由と考えられていたのである。(憲法)

(40) ダーウィンは変異の例を数多くあげている。彼は園芸家がときどき目にする「植物の変わりもの」と呼んでいるものは、実は変異が積み重なって生じたものだと指摘している。もともと、後で述べるように、突然変異は一九〇一年、ド・フリースが提唱した概念で、ダーウィン自身はまだ突然変異という言葉は使っていない。

彼は、さらにモモの木の芽からネクタリン（ツバイモモともいう）が生じたこと、人が飼育しているハトは野生のハトの変異種であることなどを論じている。ダーウィンは『種の起原』の中で、かなりの部分をさいてこの変種について述べていて、読み通すのが苦痛なくらいである。(進化)

(39)の第一行目の「注目されている」は一般的に現在も注目されていると読めるので「運動長期」とした。そのほかの下線の部分はそれぞれ「アメリカの独立宣言」は「～を挙げている」、「ジェファソン」は「～を数えている」、「ダーウィン」は「指摘している」、「ダーウィン」はその著書の中で「例をあげている」「論じている」などのように引用表現で用いられている。

科学的入門書では筆署名や文献名などだけ表わす多少ゆるやかな引用表現がよく使われており、このような形式も「記録」とすれば、科学的入門書では「記録」は非常に多いことになる。

(41) また日本の労働組合主義は、企業別組合の長所を活かしつつ、政策要求で企業別の壁を取り払ってその欠点を補うという労組側から出てきたアイデアであるが、ここでも日経連は日本の労使関係の確立という形で対案を出しているが、やがて高度成長期に入って賃金水準が上がり始めるにおよんで、労使関係の日本化を旨とした日経連の考え方は実質的に浸透したといつてよいであろう。(企業)

(42) 西ドイツのA・E・コルンミュラーらは、二頭のネコの頸動脈を交叉させて、たがいに血流交換がおこるようにした。いっぽうのネコの脳を電気刺激して眠らせると、やがて他方のネコも眠りはじめた。このばあい、両者ともに脳波をモニターしているので、睡眠と覚醒の状態を厳密に判定できたところが、これまでの研究と飛躍的にことなっている。(睡眠)

(41) (42) などの例も、何らかの参考書に基づいて書かれていると読め、これらも一種の「記録」と言えるであろう。

こうした「記録」の用法が多いことが「効力持続」で「思考・言語」の動詞が非常に多いことと関係している。

「効力持続」の文の動詞について簡単に見てみよう。表3は、「思考・言語」の動詞がどの程度使われているかの調査である。

表3 「効力持続」の文の動詞

	社会科学		自然科学	
思考・言語	124	67.0%	92	82.9%
その他	61	33.0%	19	17.1%
合計	185	100.0%	111	100.0%

(43) バージニアの権利章典では、生命・自由・財産が生得の権利とされ、幸福と安全を追求獲得する前提として位置づけられている。(憲法) ((39) の一部抜粋)

(44) 両者ともに脳波をモニターしているので、睡眠と覚醒の状態を厳密に判定できたところが、これまでの研究と飛躍的にことなっている。(睡眠) ((42) の一部抜粋)

表3は(43)(44)の例のように、文中の「思考・言語」に関係する名詞を語幹とするものも「思考・言語」の動詞として分類した結果である。

表3で分かるように、科学的入門書の「効力持続」の文では「思考・言語」に関する動詞がかなりよく使われている。科学的入門書における「効力持続」の多くは引用や研究についての説明であることが分かる。

6. 「ている」の科学的入門書での機能

工藤(1995: 116)は「効力持続」の「ている」はノンフィクションの文脈では判断・意見の理由・根拠を説明する機能を持つとしている。

ここでアスペクトの持つ「用法」と「機能」について考えておこう。工藤(1995: 47, 63, 116)はアスペクトについて「アスペクトは、基本的に、完成相と継続相の対立によって示される、同一の動的事象に対する〈時間的展開(内的時間)の側面からのとらえ方の相違〉」としている。同時に、丸ごとの事態を示す「る」「た」と同時性などを示す「ている」などの関係については、〈出来事(運動)間の時間関係〉を示すカテゴリーでもあるとも述べ、「ている」の機能として事象の同時性、逆進性、あるいは〈原因理由の説明性〉などをあげている。工藤(1995: 43)は必ずしも一つの事象の時間的展開がアスペクト、出来事間の時間的関係が機能と截然と分けたわけではない。また、時に関わる用法であるかどうかでアスペクトであるかどうかを分類したわけでもない。たとえばアスペクトには基本的意味と派生的意味があるとして〈テンポラルな用法〉〈モーダルな用法〉〈脱アスペクト用法〉〈脱アスペクト・テンス用法〉のように拡大アスペクト・テン

ス体系の表を挙げている。

アスペクトの用法あるいは意味と機能は一体となっており判然としないものといえ、明確に区切りを設けるのが難しいのではあるが、本稿では、文章構成機能の面から考え、他の事態との関係性を表す用法、あるいは、工藤（1995）があげている「判断の根拠」などのように時を表すだけとは言えない用法を「機能」ととらえることにする。

以下に実際に科学的なテキスト中での「ている」の機能を考えていこう。

本稿の調査で得られた資料の中にも工藤（1995）が述べるような判断の根拠の表現の例も見られた。

- (45) これよりさきの和銅六年（七一三）には、わが国最初の地理書である『風土記』の編纂がおこなわれていることからみても、このころには国郡図も全国にわたって完成されたものと思われる。（地図）
- (46) これらの墾田図や開田図は免祖の特権を得るために、東大寺の初期荘園の開田地の状態を図示して提出したもので、田図そのものではないにしても、田図の手法をそのまま伝えていると思われる。すなわち、これらの地図は保存に耐えるように麻布に描かれたものが多く、その描法は、当時施行された条里制の碁盤目の地割にしたがった方格（方眼）図法の形態をとり、それに田畑林野の別や田数などを記入し、主な河川や山地、家屋などが絵画的に描かれている。（地図）

しかし、上の例は「～ことから見て」「すなわち」などの表現の助けによっている。「ている」そのものが根拠の機能を持つ、と積極的に言える例はあまり多くない。

6.1 話題提供

本稿は、科学的なテキストにおいては、「運動長期」と「効力持続」に、話題提供、前提、結論を示す機能があることを述べる。話題を提供する機能とは、本稿では、議論を続けるきっかけとなる状況の提示を指すとする。

6.1.1 「運動長期」を使った話題提供

科学的なテキストでははじめにある考えや現象などを述べ、続いてそれについて議論をするという構成が見られる。その糸口となる考えや現象、状況などが「運動長期」、「効力持続」の「ている」によって表現されている場合がある。

はじめに「運動長期」を使った話題提供の例である。

これから述べようとすることを提示する例が見られた。

- (47) では施設に収容されないでもなんとかやっていける老人たちはスウェーデンではどんな生活をしているか。次に福祉サービス面をみてみよう。

福祉面では、在宅サービスの他に老人ホーム、老人サービス・センターがあり、ホームヘルパー、ナイト・シッター、ソーシャル・ワーカーなどが配置されている。

日本人のこの国に対するイメージとしては、老人ホームはじめ老人施設はきわめて完備されていて六十七歳になって希望すればいつでもそこに入れるかのごとく思っているようだが、実情はそう生やさしいものではない。(高齢)

(47) ではスウェーデンの老人たちはどんな生活をしているか、という疑問を出し、次の段落でその答えを述べている。

社会的に認められた考えやある著者の考えをあげ、それについての議論を展開する場合もある。考えの中にはその本の著者の意見も含まれる。

(48) 世の中では、「身体の眠り」がレム睡眠で、「脳の眠り」がノンレム睡眠だとか、あるいは、「身体のための眠り」がノンレム睡眠で、「脳のための眠り」がレム睡眠だとかいうような説がまかりとおっているようだ。しかし、睡眠は「脳のしごと」である。脳が、脳自身を相手に休息させる状態が睡眠だ、とわたしは考えている。

脳は、いろいろな身体のはたらきを監視しながら、全体の調和をたもつのが専門の器官である。脳自身が休息すれば、とうぜん身体の状態もかわる。そのさまがわりに、目をうばわれすぎてはいけない。(睡眠)

(49) 川村がはっきり主張するように、いままた前脳の役割が見なおされている。

川村の主張の根拠は、みずからの研究室でおこなわれた実験にもとづいている。ネズミの中脳の前部を切断して、離断脳をつくる。かつて、プレマーがネコでえた結論(124ページ参照)は、手術直後に睡眠が持続する、というものだった。しかし、もっとながいあいだ観察したら、眠ってばかりいるだろうか。手術から回復したネズミは、正常のネズミとおなじように、覚醒やレム睡眠の指標である低振幅速波のエピソードと、ノンレム睡眠の指標である高振幅徐波のエピソードとを、周期的にしめたのだ。(睡眠)

(48) は世の中一般に考えられている説をあげてそれに対する筆者の考えを述べ、その具体的な内容を続けて語っている。(49) では新しい研究の動向が述べられ、次にその内容が説明されている。

社会現象、社会の変化などを取り上げて話題とする場合もある。

(50) デイ・ケア施設は近年、さまざまな形態をとりつつ増加し、これにともなって機能分担も漸次起こってきているが、歴史が浅いこともあってなお混然としているのが現状である。

だが、今後のデイ・ケア充実のためにはデイ・ケア各施設が、分化・分業について意識的に研究をしないと、施設相互間の協働にも支障をきたし、折角の社会投資も有効に生かせないことになる。

ことにデイ・ホスピタルで扱う対象をもっとはっきりと選別しなければならないとの指摘がなされている。たとえば孤独感を持ったり無視されたりしたケースは心理的な問題なのだから、これをデイ・ホスピタルで取扱うべきではないといった声もある。

たしかにこれらの症候が医学と関係なく起こってくる場合はデイ・センターで扱うべき

であろう。しかし医学的なものを含むケース、とくに老人の場合、強制退職とか孤独とかからくる情緒障害が身体的障害を起こしたり、またその逆にたとえば脳卒中などからくる肉体的障害が情緒障害を起こすことも少なくない。このようなケースはやはりデイ・ホスピタルとデイ・センターが共働して扱うのが妥当ではあるまいか。ことに後者のケースはソーシャル・ワークとヘルス・ケアの両サービスの密接な協力が必要であることはいまでもないところである。(高齢)

(50) はデイ・ケア施設が増加し機能分担も起こってきているが、まだ混とんとしている状況である、と話題提供をしている。この例では節の途中でさらに小さな話題、デイ・ホスピタルで扱う対象を明確化する必要がある、という話題も取り上げられ議論が進んでいる。

自然現象も話題として取り上げられる。

(51) 不確定性原理の式は物理学でよく見かけるが、いったいその効用はどこにあるのかと問われる読者がいるかもしれない。その一つは、こんなところにある……。

固体では、それを構成するたくさんの小さな原子が規則正しく並んでおり、しかもそれら原子は、狭い範囲で振動している。その振動——格子振動とよばれる——は、固体の温度が高くなればなるほど激しくなる。逆に、温度が低くなれば、原子の動きはおとなしくなってくる。

その振動の強さは絶対温度（マイナス273度Cが絶対零度に相当）に比例することがわかっているから、仮にその温度が絶対零度（マイナス273度C）にまで下がれば、きれいに並んだ原子は全部、コトリともせず静止してしまうはずである。絶対零度より低い温度はこの世には存在せず、温度とは小さな粒子が動くことにほかならない——原子の振動の激しい固体にさわるとわれわれは熱いと感じる——以上、ありとあらゆるものがことごとく止まってしまうのが絶対零度の不気味な静寂の世界である。多少、自然科学とは違った文化の進化という面からも、進化の単位が個体なのか、種なのかという疑問について面白いことがわかっている。(進化)

話題提供の「ている」は、節のはじめの方の段落の末尾近くの文の文末、あるいは(51)のように、次の段落のはじめのほうによく現れる。はじめの段落で話題を提示し、次の段落でその内容について検討する、という構成は読む側に分かりやすい文章となるということであろう。

「～と考えられている」「～が議論されている」などの「思考・言語」の表現、「調節されている」「共存している」などの現象的な表現が使われている。つまり、ある考えや主張がなされたり、一定の自然現象・社会現象が存在していたりすることを紹介し、それについての具体例を挙げる、あるいは異論を提出することを次の段落で行うという形式が見られる。

6.1.2 「効力持続」を使った話題提供

ある思想や考えを引用の形で紹介し、それによって話題を述べる方法が見られる。

- (52) 日本国憲法の条文は、近代憲法の詞華集とも言うべきもので、規定するところが実現されれば、理想の状態が現前するような思いにさせられる。前文でも、この憲法は「人類普遍の原理」に基くものであると宣言されている。

それがじつは独立宣言やリンカーンの焼直しであることは、アメリカのジャーナリストにはとうの昔に見抜かれていたところであるが、論理的にもおかしな文脈である。

ここにいう人類には、日本人も含まれているはずであり、普遍というからには、時代を越えて妥当するはずである。もしもそうなら、明治憲法も人類普遍の原理に立っていたことになるから、根本的に別なものとする必要はなかった。まして占領軍総司令部に教えられるいわれはなかった。(憲法)

- (53) そこで、まず日本の老年人口の推移をたどってみることにしよう。

老年人口が近年急増していることは前述したが、現実にとどのくらいかというところ、一九八〇年で一千万人を越したと推定されている(厚生省人口問題研究所の推計)。

第一回の国勢調査の行なわれた一九二〇年はわずか二百九十四万人だった。これが十年後の一九三〇年には三百六万人になった。この間の伸び率はわずか四パーセント強である。

ところが戦後の老年人口の伸びはというとこれが実にめざましい。一九五〇年、四百十万人に対し、十年後の一九六〇年には五百三十五万人となった。伸び率は三〇パーセントを越す高率である。さらに一九七〇年、七百三十三万人(伸び率三七パーセント)、そして一九八〇年で一千四十三万人(推定)となったわけである。(高齢)

(52) は日本国憲法前文で基本的な思想が述べられていると話題提供され、それに続いて「人類普遍の原理」についての議論がなされている。(53) は老年人口の推移についてまず厚生省の推計が述べられ、それに続いて 20 世紀の日本の老年人口の変化が挙げられている。

「運動長期」は現在まで続いている意見によって議論の糸口が示されるのに対し、「効力持続」は過去の研究を引用し、それに基づいて議論を続けるという点では異なるが、ある考え、研究をもとに議論をするという点では共通している。

「効力持続」の話題提供は、多くの例は「思考・言語」の表現によってなりたっているが、中には以下のようにそれ以外の表現でなされる場合もある。

- (54) 昭和二五年に突発した朝鮮戦争で、マッカーサーが占領軍を前線に投入する必要から、「警察予備隊」七万五千人という、既存の警察官数の六割にあたる定員を創設している。これは事実上の軍隊であり、昭和二七年に保安隊、昭和二九年には自衛隊と発展して定員も大幅にふえていったことは、あらためて指摘するまでもないだろう。

崇高な理想は、現実の必要の前にわずか数年で反故にされてしまった。しかも言い出した者が平然と捨ててかえりみなかったのである。じつは理想でもなんでもなく、軍事力において日本が競争者となることを、半永久的に禁じるそのときの必要に出るものであった。いずれにしてもそれは、政策にすぎなかった。それ以上でも以下でもない。平和憲法と称して、あたかも日本国民の願望がここに実っているようなもちあげ方は、事実とはあい容

れないのである。(憲法)

- (55) ウォルター・アルバレスは地質学者で、古地磁気学を専門とする。地球は大きな磁石のようなもので、これを地磁気という。地磁気は現在は北極がS極で南極がN極であるが、過去に何回か入れかわって逆転していることがわかっている。

地磁気の逆転は地球環境に大きな影響を与える。恐竜の絶滅も、もしかしたら地磁気の逆転によるのかも知れない。アルバレスが粘土をアメリカに持ち帰ったのは、このような地磁気の変化の影響や痕跡を調べるためだった。父親のルイス・W・アルバレスはノーベル賞を受賞した物理学者で、息子が持ってきた粘土に興味を示したのである。(進化)

以上のように、「運動長期」や「効力持続」の「ている」は一定の考えや現象を提示することによって話題を提供する機能を持っていると言えるであろう。

6.2 前提

「前提」とは、先に示した話題提供のさらに前に述べられている状況を指すこととする。話題提供は問題提起をするが、その話題を導く何らかの状況を提示する場合が見られたので、そのような時に使われている「ている」を「前提」と名づけた。

- (56) 宇宙の初期にはビッグバンと呼ばれる大爆発があり、その余勢で今も宇宙は膨張し続けている。おそらくビッグバンは150～160億年まえだといわれているが、学者のなかには100億年ほどという説もあり、あまりはっきりしない。そうして宇宙空間では、星が一生を終えてきわめて密度の高い状態になり、それがブラックホールになっている。どうもこのブラックホールは一つといわず、かなりの数のものが宇宙空間にあるようだ……。 (時間)
- (57) 今日のように女性が積極的に社会へ進出するようになると、職業に“生きがい”を感じる人も出てきて、結婚しないケースもふえる。事実、昨今は“翔んでる女”とか“自立する女”がマスコミの話題になっている。なかには“未婚の母”なる存在も一部では“進んでいる”ことの証明と受けとられているようだが、むしろ異常な世潮の証とみるべきではなからうか。(高齢)

(56) では「宇宙が膨張し続けている」こと、(57) では「マスコミの話題になっている」ことを「前提」とし、「ビッグバンは150から160億年前と言われている」こと、「進んでいることの証明と受けとられている」ことを「話題提供」と考える。(56) ではビッグバンが150億年前と言われていることが話題となって次の話が続いているように読める。「話題提供」はその話題が示され、その後、その話題に関する議論が行われるが、「前提」は「話題」を述べる前に必要な状況などを示すものであり、「話題」との違いは「前提」の部分はなくても話の流れはそれほど大きな影響は受けないという点である。(56) の宇宙が膨張していることは省いても文脈は通じる。同じく(57) も(57)'のように自立する女がマスコミの話題になっていることは省くことが可能で

あろう。

- (56) 宇宙の初期にはビッグバンと呼ばれる大爆発があり、おそらくビッグバンは150～160億年まえだといわれているが、学者のなかには100億年ほどという説もあり、あまりはっきりしない。そうして宇宙空間では、星が一生を終えてきわめて密度の高い状態になり、それがブラックホールになっている。
- (57) 今日のように女性が積極的に社会へ進出するようになると、職業に“生きがい”を感じる人も出てきて、結婚しないケースもふえる。なかには“未婚の母”なる存在も一部では“進んでいる”ことの証明と受けとられているようだが、むしろ異常な世潮の証とみるべきではなかろうか。

(56) (57) に違和感がないということから、話題として提供されている情報は「ビッグバンは100億年前と言われている」「社会に進出した女性の中では“未婚の母”という存在も“進んでいる”ことの証明と受け取られている」ことと理解可能と言えるであろう。

そう考えた場合、ビッグバンがあって現在も宇宙は膨張し続けている、という前提があり、そのビッグバンは100億年前に起こったと言われている、のように説明することは状況をより明確にすることに役立つと言えよう。結婚しない女性も増え、“自立する女”がマスコミの話題になっている状況があるが、その中で、未婚の母になる道を選ぶことが進んでいることの証明と受け取られていることが異常だと論じている。この流れの中で「話題になっている」「受け取られている」などのように、「話題」の状況を設定している表現を「前提」とすることでテキストの流れの中での機能とすることができるのではないかと考える。

このような「前提」としては、「話題」が述べられている段落の中で「話題」より前におかれているものを採用した。

「前提」という区分を設けたのは、「話題」というほど明確に後続の文脈と関係しないが、一定の状況を述べている表現があるためである。

しかし、「前提」と「話題」は区分が難しい例もある。

6.3 結論の提示

話題が提示され、例をあげたり研究史を述べたりして、筆者はその話題についていろいろ議論する。そして最後に結論を出す、そこに「運動長期」「効力持続」の「ている」が使われることがある。

6.3.1 「運動長期」を使った結論の提示

いくつかの例から導かれる結論を、研究者の考え、研究者によって出された結論という形でまとめることがある。

- (58) カゲロウについても、同じような現象がある。エペオラス・ウエノイとエペオラス・エス

キュラスは賀茂川の中流部と上流部を棲みわけている。この二つのカゲロウは、地域的な棲みわけと同時に、羽化する時期についても季節的な棲みわけをしている。エスキュラスはクロスジギンヤンマと同じように、初夏に羽化してしまうのに、ウエノイはギンヤンマと同じように、後から羽化するのである。

今西は、生物の世界が多数の種社会から成り、それぞれの種社会が地球上に棲みわけることで、お互いに共存していると考えている。このような棲みわけがどのように形成されてきたかについて説明しようとするのが「今西進化論」なのである。(進化)

- (59) ダーウィン進化論の弱点は、むしろダーウィン進化論が進化の統一理論だと長く信じ込まれてきたことにあるのかも知れない。

この本では、このような最近の進化論の現状をくわしく説明したいと思っている。まずダーウィン進化論と、その流れを正統的に継承した総合進化説を解説したうえで、中立進化説、連続共生説、ウイルス進化説といったまったく新しいタイプの進化説を紹介しよう。また広く人気がある今西進化論と断続平衡説も取り上げてみる。

もともと進化論には適応、系統、分岐という三つのテーマがある。ダーウィンは「適応」をもっとも重視した。ダーウィン進化論や総合進化説は、生物が環境に適応して生き残ることから進化がはじまるとみる。(中略)

分子生物学の進歩によって、遺伝子に書かれた進化の歴史が解読できる時代に入ったのである。「分岐」というのは、どのようにして新しい生物が誕生するのかということである。今までは突然変異だけが新しい生物を生み出す要因と考えられてきたが、連続共生説やウイルス進化説は、それとは別の考え方がありうることを示している。(進化)

- (58) はカゲロウのすみ分けについて述べて、それに対する今西の考え方を紹介して節の終わりとしている。(59) は進化論の流れについてのたまかな考え方を述べ、進化論の中のいろいろな説を取り上げることを語り、最新の説の考え方を紹介してその節を終えている。

- (60) こういう、(財産権を制限された当事者でない) 第三者への補償や、生活上の補償まで考えあわせると、現実には憲法からかなり隔たったところへまで来ていると考えざるをえない。それは、生存権で説明できるものでもない。生存権なら生活保護法の問題になり、健康で文化的な最低限度の生活保障ですむからである。

にもかかわらず、このような補償が当然とされるのも、できるだけもどおりの水準の生活が続けられるよう配慮するという、日本人に独自の人権感覚があるためではないかと考えられる。そのようにして、憲法規定の足らないところ、身に合わないところも必要によって補修されているのである。(憲法)

- (60) は「思考・言語」の動詞以外の動詞によって結論が示されているが、内容としては憲法で規定されていない部分については別の考え方によって補っているということであり、法的な考え方を述べているともとれる例である。「補修されている」は「結果状態」ともとれる可能性も

ある。しかし、ここでは、いろいろな問題が起きたときに憲法で足りない部分を補いつつ法を解釈しているともとれ、その場合は「運動長期」にあたると理解した。このように、「思考・言語」の動詞を使って、あるいは「思考・言語」動詞以外の動詞によって、「運動長期」の用法で結論を示すことが可能である。

(61) のように長期的な運動、(62) (63) のように長期的な変化によっても結論を示すことができる。

- (61) こうした生物同士の共生の例は、ほかにもたくさんある。しかし、共生とはいっても、それぞれの生物はまったく別々の個体として生きているのである。(進化)
- (62) 三菱重工や川崎重工などはもともと重機部門が大きな比重を占めていたが、これに合併した石川島播磨などが続き、造船専門に近かった三井造船や日立造船などはずっとおくれはしたが、70年代後半以降の構造的造船不況の中で、結局はリストラクチャリングに取り組むことになる。残る独立系の専門造船会社、たとえば佐世保重工業、函館ドックなどは、再編成の波の中で何とか生き残りをはかろうとしている。(企業)
- (63) こうした細胞内共生という現象が、真核細胞の成立そのものにかかわっているのではないかという考え方がある。それが、細胞進化における共生説と呼ばれている仮説で、今や、進化論の分野では一つの潮流となりはじめているところなのである。(進化)

6.3.2 「効力持続」を使った結論の提示

次に「効力持続」の例を見てみよう。

はじめに「思考・言語」の表現を使った例である。

- (64) ホールステッドは、今西が発見したカゲロウの幼虫の棲みわけ現象が、今西の主張するようなプロト・アイデンティティ（直訳すれば原帰属性）などによるものではないと批判している。

さらに、今西が生物社会の本質が競争よりも調和にあると考えるのに対し、「最近の淡水、海洋、陸上での実験、生態学的研究は、全研究例の約九〇パーセントにおいて種間競争があることを示している」と、今西進化論を強く否定している。(進化)

次は過去の事態をあげて結論としている例である。

- (65) この弱い相互作用のなかだちをする粒子としては、ワインバーグやサラムらによってウィークボソンという粒子が提唱され、フランス（実際にはフランスとスイスの国境にまたがっている）のセルン（シーイーアーえぬ）という研究所の大型荷電粒子加速器を使って、イタリアの実験物理学者ルビアの率いるチームが、この検出に成功している。(時間)

(65) は実験成功という過去の事実が結論となったものである。

(66) は社会現象の例である。

- (66) このような人口の老齢化は日本だけの現象ではない。これは工業化にともなって大なり小なり起こるものだ。たとえばスウェーデンは一八五〇年に四・七九パーセントだった老年人口係数が一九一〇年には八・四四パーセントといまから七十年も前に現在の日本と同じ水準に達している。そして一九七五年には一四・八八パーセントと文字どおり高齢化社会となった。

イギリスも一八五一年に四・六五パーセントだった老年人口の比率が一九三九年に八・九七パーセント、一九七五年には一三・六四パーセントに達している。つまりスウェーデンやイギリスなど早目に工業化した国々は、日本よりも早目に本格的な高齢化社会に突入し、その厳しさを痛いほど体験しているわけである。(高齢)

次の例は前の段落で一度結論が出、その後、それを受けて最終的な結論を出している例である。文章によってはこのように、少しずつ結論を出しながらまとめていくものもある。

- (67) とはいうものの、これに異を唱える学説がないわけではない。カリフォルニア大学のハンネス・アルフベン名誉教授は、自分の専門であるプラズマ理論から宇宙の創成を説明しようとしている。プラズマとは超高温の物質が振動する現象だが、彼はこのプラズマ状物質から星団や銀河が生まれたとしている。ちなみにアルフベンはネールと共に1970年度のノーベル物理学賞受賞者である。

彼の計算によれば150億年どころではなく、宇宙の初めはもっとも過去になるらしい。もちろん彼の説くところにもそれなりの根拠はあるが、少数派であることは確かである。要するに、ことほど左様に宇宙というものにはさまざまな考え方、いろいろな学説があるということでもある。(時間)

7. 話題提供・結論をもたらすもの

「運動長期」と「効力持続」は状況・背景を提示して話題を提供する、前提を表現する、結論を示すことがあるという点で、機能としては同じものを持っていることが分かった。これらはどのようにして話題提供・結論表示の機能を持つのであろうか。

いくつかの要因が考えられる。第一に、「運動長期」「効力持続」では「思考・言語」に関する動詞がよく用いられており、それらはある考えや研究結果を示している。これが話題提供や結論の提示の機能を果たすのであろう。これまで多くの研究結果(工藤1995、浜田他1997、二通他2000、庵2001)が示しているように、「効力持続」の「記録」の用法は引用を示すことができる。同時に「運動長期」の「思考・言語」に関する動詞を使った場合でも、「と考えている」「とされている」などのように、先人あるいは筆者の研究や業績あるいは考え方を表わすことができる。「効力持続」と「運動長期」の違いは、出典があるかどうか、その考え方が一度現在と切れて過去のものとなっているかどうか、という点であり、大きな違いとは必ずしも言えないことがあげ

られる。このような先行研究は議論の前提となり、結論としても用いることができる。

また、「運動長期」が社会現象や自然現象を示すことができるという点が関係するであろう。ある社会現象があると述べ、これに注目してその現状を詳しく説明し、その成立の原因を述べる、あるいはある自然現象があることを示し、それに関係するいろいろな要素を取り上げそれらについて議論する、というように、現象とその内容の説明、原因の究明によって一つの節が成立する構成ができるであろう。

次に、「効力持続」の「ている」は統括主題が存在する文脈で用いられる（井上 2001）という性質が働いていると言える。井上（2001: 120）は「た」と「ている」の使い分けについて論じ、「ている」の「経験・記録」用法は「過去の出来事を、発話時において有効なある統括主題（複数の類似の出来事の背後にある一つの状態）に従属する一事例として述べる」としている。本稿は井上（2001）の分ける「経験・記録」用法と「過去」用法の「ている」を井上ほどくっきりと分けるわけではないが、井上（2001）のあげた統括主題の存在は「ている」がなぜ話題提供や結論で用いることができるかを明確に説明する。一つの統括主題のもとに、過去の研究を引用して話題を提供し、続く節で議論をし、最後に結論を出すという文章の構成を科学的入門書では行っているわけである。

「効力持続」の「ている」が現在と関係を持つという点も重要であろう。現在のわれわれの問題意識に対し、このような過去の研究あるいは事態があると述べ、それは現在の関心と関係があることである、と「効力持続」の「ている」を使って述べていることになっている。結論に「効力持続」の「ている」を用いる場合も、その結論は現在の我々と関係があると述べることになる。

以上、「運動長期」「効力持続」が結論を示すことができるのは、それ以前にあげられた具体的な事例や議論の後、ある考え方が示されたこと、一定の社会現象や自然現象が成立したこと、ある変化が始まったことを述べるのが結論として適当なためであろう。

本稿では「運動長期」「効力持続」が話題提供、結論を示す機能を持つと述べたが、あるいはこれは「運動長期」「効力持続」に限ったものではないという考え方も可能かもしれない。「効力持続」の持つ統括主題の存在は段落全体に関わる要素として重要ではあるが、別の見方をすれば、段落の初めにおかれる状態性の記述そのものが一定の現象や状態を示し、そのことをもとに議論を続けるという段落の構成が考えられるのではないか。同時に、議論を進めてきた最後に現在はこのような結果になっている、このような状態が続いている、などのように、状態性の記述によって結論が示されると考えることも可能と言えよう。今回は「運動長期」「効力持続」の機能ということで考えてきたが、次は、より広い、「結果状態」、「性状」なども視野に入れて、状態性の記述の文章中の機能を考えてみる必要があると考えられる。

8. まとめと今後の課題

本稿は科学的入門書を資料として「ている」の使われ方の調査をした。

従来の研究と違っている点は動作継続を「運動短期」と「運動長期」に分割して「運動長期」の用法に注目した点である。用例を検討したところ、「運動短期」と「運動長期」は用法が異な

ることが分かった。「運動短期」が日常的な動作の継続を表現するのに対し、「運動長期」は長期間にわたる行為や作用、社会現象、自然現象、思想や研究動向、変化を表すことができ、科学的入門書では重要な働きをしていることが分かった。

科学的入門書での「ている」の使われ方では、「運動長期」「効力持続」「結果状態」「性状」の用法が多かった。

「運動長期」について、さらにその内部の用法を見たところ、「運動」「現象」「思考・言語」「感情感覚」と大きく分類でき、大まかに「運動」「現象」「思考・言語」は1/3程度ずつ使われていることが分かった。つまり、「現象」「思考・言語」の比重は高いと言える。

「運動長期」と「効力持続」は、科学的入門書では「話題提供」「前提」「結論」を表現する機能を持っている。「効力持続」は小説では一時後退性を示すとされるが、科学的入門書での機能は異なる。科学的なテキストは一定の現象や状況を示し、それについて議論したり解説したりし、結論を社会現象・自然現象・一定の考えとして示すという構成になっている。そうした文脈の中では、「運動長期」「効力持続」の「ている」は研究の結果や研究者の主張、ある自然現象あるいは社会現象を取り上げ、そのことによってその節で何を問題にするかを提示するという「話題提供」あるいはその前提となる事象を提示する役割を果たしていた。そして、結論部分でも、「運動長期」「効力持続」が一定の現象や考え方、社会的自然的変化を示す形で用いられることがよくある。

科学的入門書で「運動長期」「効力持続」が「話題提供」「結論の提示」に用いられるのは、「運動長期」が現在まで続く一般的な長期的な考えや主張を表すことができるためであろう。また「効力持続」では「記録」の用法が科学的なテキストでは引用として使われることが有効に働いていると言える。「効力持続」の用法では統括主題の存在が、話題・議論・結論の構成と関わっているであろう。「効力持続」が現在と関係を持つことが、現在の我々の問題意識と共通する話題を取り上げること、関心があり、現在と関係がある結論を提示することに役割を果たしているとも言える。

以上のように、科学的入門書での「運動長期」「効力持続」は会話や小説とは果たしている機能が異なることが分かった。

一定の状態という点では「結果状態」「性状」も状態や状況を表現できるであろう。今回は「結果状態」には触れることができなかったが、「結果状態」「性状」などが話題や結論の提示とどのように関わるか、別の機会に考えてみたい。

参 照 文 献

- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤井正 (1966) 「動詞+ている」の意味『国語研究室』5. (金田一 (編) 1976 に収録, 97-116).
- 藤城浩子 (1996) 「シテイタのもう一つの機能—感知の視点を表すシテイター」『日本語教育』88: 1-12.
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』東京: くろしお出版.
- 庵功雄 (2001) 「テイル形, テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4: 75-94.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「た」」つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』97-164. 東京: ひつじ書房.

- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15. (金田一 (編) 1976 に収録, 5-26).
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X (文学 4). (金田一 (編) 1976 に収録, 17-61).
- 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』東京: 麦書房.
- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13(4): 51-88.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』東京: ひつじ書房.
- 許夏珮 (2000) 「自然発話における日本語学習者による「ている」の習得研究」『日本語教育』104: 20-29.
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』東京: アルク.
- 中村英子 (1996) 「動作動詞テイル形の「反復」について—「反復」の解釈が生まれる諸条件—」『日本語教育』93: 73-83.
- 二通信子・佐藤不二子 (2000) 『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』東京: スリーエーネットワーク.
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって (上)」『教育国語』53: 33-44.
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって (下)」『教育国語』54: 14-27.
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』東京: 秀英出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第2巻. 東京: くろしお出版.
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」*Linguistic Communications* 9. (金田一 (編) 1976 に収録, 155-328).

Long-term Progressive and Perfective Usages of *teiru* in Scientific Books: Describing the Premise and Presenting the Conclusion

GODA Sumire

Project Collaborator, National Institute for Japanese Language and Linguistics
Japan Women's University

Abstract

This study examined the function of *teiru* in scientific books, focusing on its long-term progressive and perfective usages. Following Kyo (2000), this study categorized the progressive usage of *teiru* into two types: short-term progressive and long-term progressive. The first describes the progress of everyday actions, whereas the second presents a social or natural phenomenon or a writer's thoughts on a certain phenomenon. The perfective usage of *teiru* implies that the influence of a past event still remains in the present situation. In scientific books, the perfective usage is applied to quote a preceding study.

In scientific books, long-term progressive and perfective *teiru* have the function of expressing a “topic of a paragraph” or “conclusion”. When used at the beginning of a paragraph, *teiru* functions to establish the premise of an argument by presenting a thought, situation, or phenomenon before the discussion of the continuous part. And, at the end of a paragraph, *teiru* indicates the conclusion by expressing the thoughts and opinions of the writer or mentioning a social or natural phenomenon.

The reason why these usage of *teiru* are used to express the “topic of a paragraph” or “conclusion” is that the long-term progressive or perfective usage of *teiru* can express a theory, thought or general phenomenon. The perfective usage shows the assumption of a topic or a conclusion by quoting a preceding study. The unifying topic in the perfective usage of *teiru* acts to relate a topic, an argument, and a conclusion to each other.

Key words: scientific books, perfective usage of *teiru*, long-term progressive usage of *teiru*, premise, conclusion